

2023 年度(第 32 回)セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖 春風吹く浜名湖でジュニアセーラー50 名がレースに挑戦

2024 年 3 月 22 日から 24 日にかけて、静岡県浜松市の三ヶ日青年の家のハーバー沖で「2023 年度(第 32 回)セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖」が開催されました。

全国各地のセーラーが参加し、世界の舞台へ羽ばたいていく機会となってきた本大会は 32 回目を迎えました。ジュニア/ユース世代の技術向上とセーリングの普及という理念が受け継がれ、歴史ある春の一大イベントとなっています。

今大会では、全クラスに向けてのセーリング勉強会も行われ、ジュニア世代の参加者たちが、セーラーとして一回り大きく成長できるような 3 日間となりました。



変化するコンディションへの対応力が試された本大会

今年の早春の浜名湖には、全国から50名(50艇)のセーラーたちが集まり、レースに挑みました。大会はOP初級(参加10艇)、OP上級(参加8艇)、ILCA4級(参加15艇)、ILCA6級(参加17艇)の全4クラスで行われました。



大会初日は、雲ひとつない快晴と安定した西風(5~7m/s)で、良好なコンディションのなかですべてのクラスで3レースが行われました。

2日目は、雨と微風のコンディションでILCA4級・ILCA6級でレースは中止、OP上級・OP初級は2レースを行いました。OP上級クラスでは、微風コンディションにもかかわらず、フィニッシュ前の競り合いが見られるなど、選手たちの意気込みが感じられるレースとなりました。

大会3日目は、無風コンディションにより全クラスの最終レースが中止となり、レーザー級は初日の3レースの結果がそのまま大会結果へ。コンディションが変化するなかでも、1レースごとに自分の走りができただうかがが試されるような形となりました。



ひとりのセーラーとして大きく成長する機会に

「セーリングを通した心身ともに健全な子どもたちの育成」という大きな目的に基づき、レベルの高い運営スタッフ陣が集まった本大会。ILCA4(レーザー4.7 級)は、世界選手権国内選考会を兼ねており、15 艇がエントリーしました。レベルの高いレースであったことはもちろん、順位にかかわらず、すべての選手たちが伸び伸びとしたレースを見せてくれました。

2 日目のレース後には、永井久規さん(日本レーザークラス協会)による特別講義を全クラス対象に行いました。「レース前・レース中に行ってほしいルーティン チェック項目」と題し、大会前日までの天気予報の確認にはじまり、レース前後の食事習慣へのアドバイスまで細かくレクチャー。単純なセーリング技術の向上に留まらず、海にでるひとりのセーラーとしての総合的な力を育み、全体的なボトムアップを促すような時間となりました。各クラブのコーチや選手の保護者らも参加し、セーリングに関わる一人ひとりが改めて自らの役割を認識できたのではないのでしょうか。

強風コンディションの多い浜名湖で、2 日目と 3 日目は微風かつ雨というコンディションとなり、レースに向けて待機する選手たちは、さまざまな想いを抱えていたでしょう。それでも、「三ヶ日青年の家」の充実したハーバー環境のもと、同世代のセーラーたちとともにかけがえのない時間を過ごせたことは間違いありません。

来年もまた、多くのジュニアセーラーが風を追いかけて浜名湖へ来てくれることを、期待しています。





【各クラス優勝者と選手の顔ぶれ】

OP 初級 優勝

城石 朋春 <B&G 高松海洋クラブ>



海が身近にある小さな島育ちで、幼少期から兄に付き添い、あらゆる海遊びをしていたという生粋のマリン少年。ひとりで船に乗れるようになるまでの 5 年間は、いつも誰かのヨットに乗せてもらっていたという。今大会での勝因は勤が効いたのでは、と自己分析。「ヨットは船を自分で操縦するのが好き」と乗り物としての魅力を語ってくれた。

OP 上級優勝

加原 賢人〈江の島ヨットクラブジュニア〉



兄の影響で小3からOP級に乗りはじめ、最近は納得できるレースができるようになったという。今大会では、最初のスタートがしっかりきれて、そのままの順位をキープすることができたと喜びの声を聞かせてくれた。「よく食べて、土日しっかり練習したことで速くなりました」と身体づくりについてもアピール。「世界一位を取りたい！」と恥ずかしげながらも明言した。

ILCA4 級 優勝

岩波 萌夏〈江の島ヨットクラブジュニア〉



両親の影響で小3の頃にはじめ、いまもヨットを続けているのは、友達との練習が楽しいから。「浜名湖の強風をはじめて体験して、風の強弱があつて難しかったがよい練習になった」と振り返る。強い風のなかで走る練習をしてきたからこそ、練習の成果がだせたのでは、と分析。「世界に通じるぐらい、速くなりたい」と意気込む。

ILCA6 級 優勝

岡田 佳悟 〈江の島ヨットクラブジュニア〉



サッカークラブの先輩に誘われ、小 2 のときに OP 級で乗りはじめてからはヨット一筋。「今大会では全 3 レースとも風があり、スタートが全レースきまったところで勝負を決められた」。練習してきたことが、しっかり結果につながったと胸を張る。

他選手が行くコースを気にして走るのではなく、自分の行きたいコースへ行くことを心がけたレースをしていきたいという。世界選手権入賞を目指す。



第 32 回セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖は
スポーツ振興くじの助成金を受けて実施しています。